

「なにか違う」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 7章 40-52節

「違和感」という言葉があります。辞書によると、「自身の感覚や認識と現実の状況が一致しない時に生じる心理的な不快感」とか「体調不良や病気の初期症状として感じる不快な体感」などと説明されています。もう少し砕いて言うと、「生理的・心理的にしっくりこないという感覚」といったところでしょうか。例えば、スポーツ選手が、故障とまではいかないけれども、どこか調子がよくない時などに時々「右ひじに違和感がある」などと表現したりします。大したことないかもしれない。言葉でうまく表現しにくいけど、でもなにかしっくりしない。そんな微妙な感覚を「違和感」という言葉で表すわけです。私たちの日常では、そんな微妙な「違和感」を感じる瞬間はあるでしょうか。微妙なもの、大したことないと思われるものでも、実は後々自分の行く道を大きく左右する大事なサインかもしれません。

今回の聖書は「ヨハネによる福音書」7:40-52 です。「^{かりいおさい}仮庵祭」というイスラエルの秋の祭り、この祭りは、ユダヤの三大祭りのうちの一つで、秋の収穫祭であるとともに、大昔のイスラエルのエジプト脱出を記念し、出エジプトの民が荒野を放浪している間、幕屋、すなわち仮の庵で生活したことを偲ぶ意味合いも伴った、約1週間にも及ぶ祭りです。大変盛大に行われていたことであろうと思われませんが、この仮庵祭に、イエス・キリストは人目を避け、隠れるようにして上って行かれました。なんでイエス様はそんな風にこそこそとしなければいけなかったのかというと、それは 7:1 において「ユダヤ人が殺そうと狙っていた」とあるからです。なるほどそれは確かに危ない。でもなんでイエス様は、そこまでして仮庵祭に行こうとしたのか。危ないからやめといたらいいのに。

イエス様は最初、兄弟たちから「あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしていながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい」(7:3-4)といわれていました。正しいことをやっているのなら、堂々とやったらいいのにと。非常に無責任な言葉ですが、それに対してイエスは、私の時はまだ来ていないからだ、私はこの祭りには上って行かないと突っぱねていたわけです(7:6-8)。しかし、そ

れにもかかわらず、その後イエス様が仮庵祭に身の危険を冒して行ったのは、やはり今こそ公然と福音を語っていかねばという気持ちになったからかもしれません。仮庵祭においても、ナザレのイエスの噂はいろいろとささやかかれていて、「良い人だ」と言う者もあれば「いや、群衆を惑わしている」と言う者もおったわけですが、それでもイエスについて公然と語る者はいなかったのです。あくまでひそひそとささやき合うくらいしかできなかつたわけです。9:22 には、ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていた、と書いてあります。イエスの肩を持つようなことを言ったなら、ユダヤ教の指導者たちによってイエスの仲間とみなされて共同体から追放されてしまうからです。追放されるだけでなく、イエスと共に罰せられるかもしれない。だから誰も、公然とイエスについての議論さえもできなかつたわけです。

人が自分らしくありのままにしていることのできない世の中、信じたいものを信じることを許されず、思うことを発言することもできない世の中はおかしい。「みんな生きているだけですばらしいんだ、みんな優勝なんだ」とつぶやいたそばから、「お前は偉くないから予選敗退だ。死んでください」などと、1ミリも面白くないツッコミでけなされるような、そんな世の中を、私たちの神様は望んではおられないでしょう。だからイエス様は祭りの半ばに差し掛かった時、神殿の境内で語り始められました。世の行っている業は何かおかしいと証し始めたわけです。イエス様は神の国が実現するため、つまり、権力を持った人間の支配ではなく、神様によるこの世の支配が実現するために、恐れを捨てて語り始められたんです。

このイエスの行動、このイエスの言葉は、それを見聞きしていた群衆に少なからず影響を与えました。「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」「これは、人々が殺そうと狙っている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われぬ。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか」「メシアが来られても、この人より多くのしるしをなさるだろうか」などなど。自分の命の危険を顧みず、公然と福音を語るイエスに、人々の心が動かされ始めたわけです。

自分の命の危険をかえりみずに何かをなすというのは、よほどのことがないと私たちに現実的には考えられません。命の問題に限らずとも、自分という存在をか

けて、つまり自分がどんなに周りから不本意に評価されようとも、自分がどんなに傷付けられ、辱められようとも、ひたすら自分の信念に従って何かをなしていく、あるいは何かを外に働きかけてゆくこと、それも本当に難しいことです。しかし自分の信じる道をひたすら進む姿には、周りも知らず知らずのうちに影響されてゆくものなんでしょう。

このようにイエスのわが身を省みない、ひたむきな姿は人々の心を動かし始め、人々はイエスのことを本当にメシアなのではないかと信じ始めたわけですが、しかし、その一方で「メシアはガリラヤから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか」とイエスのことを疑う者もありました。その筆頭が、ユダヤ教の祭司長たちやファリサイ派の人々であったわけですが。彼らはイエスを捕まえるために送った下役たちが手ぶらで戻って来た時、「お前たちまでも惑わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか」と叱り、下役たちをかばう発言をしたニコデモに対しても、「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」と偉そうに話しています。彼らは聖書の言葉をよく知っているだけに、だからこそ自分たちの考えが正しく、他の人々は惑わされているだけなのだと思います。つまり、彼らはイエスをメシアであると信じることを、メシアかもしれないと考えることを、律法の無知からくる呪われた行為だと決めつけているわけですが。

しかし、そんなファリサイ派の人々と対照的に、いわゆる「無知」な下役たちはイエスと出会い、変化を見せています。下役たちは本来なら、命令ですからただイエスを捕らえて来ればよいだけでした。しかし「イエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった」のです。イエスと出会った彼らにはできなかったのです。下役たちは祭司長たちに「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えました。この言葉は、自分たちはあえてイエスを捕らえなかったのだということを意味しています。そうでなければ、逃げられましたとかいろいろと言い訳はできたでしょう。彼らはあえてイエスを捕らえることをせず、そのことを祭司長たちに報告したのです。なぜ彼らはイエスを捕らえなかったのか。彼らは「違和感」を感じたのではないかと。祭司長たちはイエスのことを、人々を惑わす悪者だ、あの男は聖書の預言

するメシアなどではない、捕まえて殺さねばならないと言っていたけれど、イエスを目の前にしてイエスの話を聞いた自分たちには、どうしてもイエスが悪者で、殺されるべき人物であるとは思えない。祭司長たちの理屈は分かるし、自分たちもなぜこんな風に思うのかうまく言えないが、でもイエスを捕らえることが正しいとは思えない。何かが違う気がする。そして彼らはイエスを捕らえなかったことを報告しました。そのいわゆる命令違反は、身分など上下関係の厳しい当時の社会においては、大変勇気のいる行為だったことでしょう。しかしそれは同時に、彼ら下役たちにとっては、非常に新鮮な、人間性の回復の第一歩であったことでしょう。そして彼らのそんな「違和感」と「変化」を理解してくれたのは、イエスと以前出会い対話したことのあるニコデモだけだったんです。

このように私たちも、私たちをいのちの回復へと導いてくださるイエス・キリストとの生きた出会いを経験することで、今まで何も感じなかった聖書の様々な言葉が、生きて私たちの心に響いてくることを感じるができるはずです。私たちがイエス・キリストと出会っていなければ、どんなに立派な聖書の言葉も力を持って迫ってくることはない。でもそれでは、どうやったらイエス様とちゃんと出会うことができるのか。それはやはり、この聖書の、特にこの福音書のイエス様の 1 つ 1 つの物語を「私の物語」として読んでいくことで、キリストとの出会いは必ず与えられてくるのだと私は思っています。そうやってイエス様と本当に出会うことができたなら、イエス様の語られた言葉を「私にかけられた言葉」として受け取ってゆく、そのような形でイエス様と出会うことができれば、私たちは今まで見えてこなかったいろいろなものが見えてくるようになります。私たちの日常生活においても、イエス様の教えに照らし合わせるとおかしいことが実はたくさんあるということが分かってくるように思います。私たちは、常にキリストの言葉——キリストが他でもない私に向けて語ってくださった言葉——に耳を傾けながら、日々いろんな瞬間に感じるそんな「なにかちがう」という違和感を大事にして、イエスを捕らえなかった下役たちのように「今まであの人のように話した人はいません」とイエスを証し自分の意志を示していく者となっていきたいと思います。